

2023  
としょうかの

# あれこれ ブックガイド

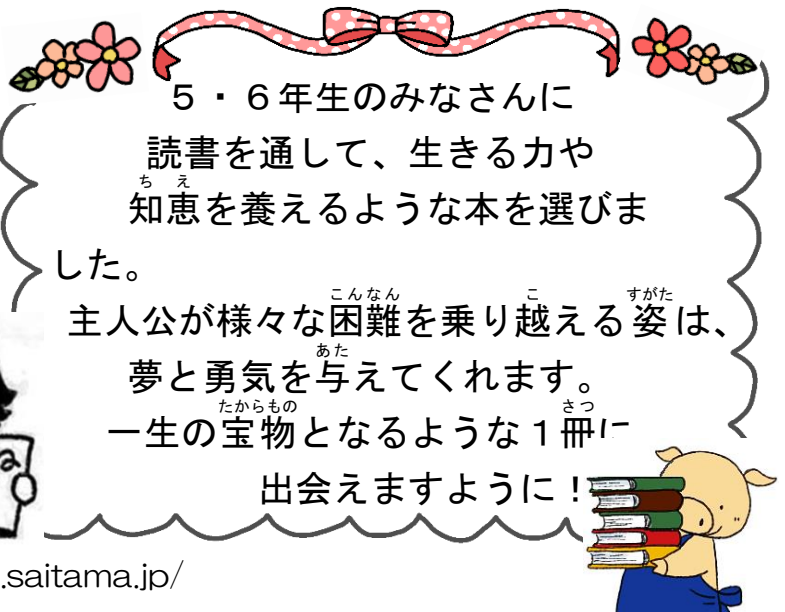
パート 27

5・6年生むき



入間市立図書館 ☎2964-2415

ホームページアドレス <https://lib.city.iruma.saitama.jp/>



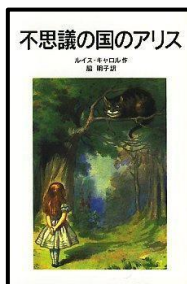
5・6年生のみなさんに  
読書を通して、生きる力や  
知恵を養えるような本を選びま  
した。

主人公が様々な困難を乗り越える姿は、  
夢と勇気を与えてくれます。  
一生の宝物となるような1冊に  
出会えますように!



## 「不思議の国のアリス」

ルイス・キャロル/作  
脇明子/訳 岩波少年文庫  
ものがたり《キャロ》



真夏の昼下がり、チョッキを着た白いウサギを  
追いかけてあなに飛びこんでみると、そこは…。

にやにや笑うねこ、お茶を飲むウサギとヤマネ、ト  
ランプのハートの王様と女王様、いばりんぼのネズミ、  
年取ったカニたちがぐらす不思議な世界。

ディズニー映画にも出てくるので知っている人も多  
いと思いますが、味わい深い表紙や挿絵、言葉遊びな  
ど、本を読むことで新たな楽しさや感動が見つかるは  
ずです。

## 「日本のことばずかん いろ」

神永暁/監修  
講談社 《810》



日本語には色をあらわす言葉がとて  
もたくさんあります。たとえば、赤を表す言葉には「茜  
色」「朱色」。青を表す言葉には「藍色」「紺」といったよ  
うに、1つの色だけでもさまざまな名前がありますね。色  
によっては、花や草から名前をつけたものもあれば、生き  
物から名前をつけたものもあります。

この本では、美しい写真や絵といっしょにたくさんの  
色の名前が、しょうかいされています。表紙の浮世絵も色  
あざやかですね!

## 「鳥をつくる」

メグ・マッキンレー/文  
マット・オットリー/絵  
井上 舞/訳  
化学同人 絵本《か19》



鳥をつくる?でも、どうやって?

この絵本には、一人の少女が、時間をかけてひとつの  
ものを作りあげていく様子がえがかれています。ていね  
いに計画を立てて、必要なものを集めて、想像力を働か  
せて…。こうして作られた鳥が本当に空を飛ぶことなど  
できるのでしょうか。「ほんとうの鳥」になるために必要  
なものはなんなのでしょう。みなさんもぜひ考えてみて  
ください。

息をのむほど美しい絵と、詩のような文章がとても印  
象的な絵本です。

## 「富士山のまりも」

～夏休み自由研究

50年後の大発見～」

亀田良成/著 齊藤俊行/絵  
福音館書店 《474》



丸い形をした藻の仲間『まりも』。

50年以上も昔、当時小学生だった著者は家族旅行で  
富士山のふもと、山中湖をおとずれます。

湖岸で拾った『まりも』を自由研究のために持ち帰り、  
今日まで自宅で大切に育て続けてきました。時が経つに  
つれて、山中湖の『まりも』が絶滅寸前だと知ります。

おさないころの自由研究が今に役立つというロマンあ  
る1冊です。

## 「古典がおいしい！」

### 「平安時代のスイーツ」

前川佳代・宍戸香美/著

かもがわ出版 《383》



平安時代にもスイーツがあった!?

今から1000年ほど前、平安時代の貴族たちも今のわたしたちと同じように、あまいおかしを食べて楽しんでいたといわれています。この本は『枕草子』や『源氏物語』など有名な古典文学に登場するおかしを実際に作ることができるレシピがのっています。

平安時代の貴族になった気持ちでおいしいおかしをつくってみませんか？

## 「宇宙食になったサバ缶」

小坂康之 別司芳子/著

小学館 《667》



カレー、ラーメン、からあげ。給食で人気のメニューは宇宙食にもなっています。そして、日本で作られた宇宙食に、サバ缶があります。

このサバ缶を作ったのは食品会社ではなく、福井県立若狭高等学校の生徒です。先輩から後輩へ研究が受けつがれ、14年かけて作られました。サバ缶を宇宙に持っていくためには、たくさんの課題があったのです。

生徒たちが課題を1つ1つ解決していく様子をぜひ読んでみてください。

## 「チャンス」

「はてしない戦争をのがれて」

ユリ・シュルヴィッツ/作

原田 勝/訳 小学館 《936》



この本は、ポーランド生まれのユダヤ人で、絵本作家のユリ・シュルヴィッツが、おさないころに起こった第二次世界大戦での体験をつづったものです。さまざまな困難の中で、かれとかれの家族がどのように生きてきたのか。本当にあった戦争中の生活を、読みやすい文章とたくさんのイラストとともに知ることができます。この本は、かれの描いた「おとうさんのちず」という絵本にもつながっていくお話です。興味を持ったらずひかれの絵本も読んでみてください。

## 「和ろうそくは、つなぐ」

大西暢夫/著 アリス館《576》



和ろうそくの作り方を知っていますか？和紙で作った芯に、ハゼの木の实から作られる蠟を何度もぬりこみかわかします。

ろうをしばったあとに出る蠟カスは、藍染職人によって温める燃料として使われます。藍染の染液を作る時に出る灰は、器にぬるうわぐすりとして再利用されます。

すてるしかないと思われるものも別の職人の手で生まれ変わり役に立ちます。ムダなものはなく、つながっていくのです。昔から続く物作りの伝統と過程を写真とともにしょうかいした1冊です。

## 「ともだちは海のおい」

工藤直子/作

理論社 ものがたり《くどう》

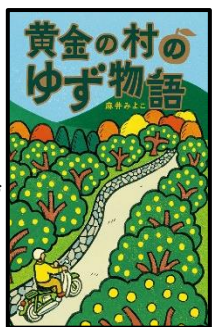


独りになると、ふと友達がこいしくなる。そんな時ってありませんか。このお話に出てくるのは、とてもしずかな夜にはだれかとお茶を飲みたくなるか、さびしいくらいしずかな夜にはビールが飲みたいくなるくじら。いっしょに散歩をしたり、読書したり、手紙のやりとりをするうちに、こころのなかには、おたがいがいるようになりました。

日々を詩と物語でつづったやわらかい文章や、新しくなった本の装丁も魅力的な名作の新版です。

## 「黄金の村のゆず物語」

麻井みよこ/著 ポプラ社 《625》



徳島県木頭村で、日本ではじめてゆずさいばいに挑戦した人々の苦労が書かれた本当にあった物語です。

26才の臼木青年が農業普及指導技師として1軒1軒の農家に作物の栽培技術を教えて回るのですが、苦難の連続でした。しかし、村の人々の協力を得て、何もなかった木頭村はいつしか黄金の村に…。

木頭村のゆずは日本一のゆず、そして世界のゆずになったのでしょうか。

大変な努力の中にも、方言が書かれているためかどこかほっこりする、ゆずの魅力が詰まったお話です。